メープルレター（６５）
誕 生 会

空の色が薄い青色に変わり、晩夏から初秋のころとなり、雁も渡りはじめました。北国の季節は変わろうとしています。ともかく雨の多い夏でした。と書き始めていたら、突然、晴れて猛暑。それでも、また、すぐに大雨になるようです。訳の分からない空模様に振り回されております。

窓から見えるオールドポートには３年ぶりに２―３千人のりの豪華客船が停泊しています。早朝６時に入港し始め、方向を徐々に変え、ゆっくりと進みながら桟橋に着くのは、３０分ほど後のことです。狭い港でレーダーと格闘としながら舵をとっていくのかもしれません。あら、この船には水先案内がついていません。こんな大きい船なのに珍しいことです。この桟橋の向こうには、税関なども入った建物と大桟橋があります。紅葉狩りのころになると、大型豪華客船がひっきりなしにここに停泊することになるでしょう。この建物の上にあるテラスは野草が埋め尽くす自然公園になっています。その突き当たりにはガラスで覆われた展望台が建築されつつあります。ここからあちこちの方向に向けてライトショーが行われるはずだったのですが、建築中が続き、３－４年になります。いつ完成することやら。見えるのは立ち並ぶクレーンのみです。

８月は、ドリトル先生の７７歳の誕生日のある月なので、ドリトル先生はどこで誰が祝ってくれるのか、わくわくしているようでした。義理の次男が北アメリカエコロジー学会で研究発表するため８月半ばにモントリオールに来ることになっていて、それに合わせて義理の長男の家でお祝いをすることになりました。マダム田中も、五か月間近いお籠り暮らしから出て、頑張って誕生会に参加することになりました。子供たち全員が集まる機会はめったにないため、ドリトル先生は嬉しそうでした。

「これなら年をとるのも悪くないかも。」

と微笑んでおりました。

誕生会は、あれこれとつまみながら、シャンペンを何本かあけ、楽しく過ぎていきました。義理の長男はアメリカンドリームのような暮らし方なのです。新築の高級住宅が立ち並ぶ、閉鎖された郊外の一角にプール付き、ジャクジー付きのシャトーのような大きな家に住んでいま

す。車は BMW が二台。まさにアメリカンライフです。ダウンタウンのコンドミニアムの我が家は、１０人以上集まるには手狭になってしまい、大きな家族の行事はいつの間にか、義理の長男の家ですることになってしまいました。

「今度はプールサイドでシャンペンをもう一本どう？」

長男の提案に会わせて全員がプールサイドに大移動。

孫や子供たちはプールに入り、楽しそうです。突然娘の子供がきゃっきゃっと嬉しそうにプールの中に入り、浅瀬に飛び込んでいきました。娘は、

「ちょっと待て、ちょっと待て、ママは水着じゃないし、あらーどうしよう。」

娘は、孫娘をひっぱりあげ、両手ですくいあげ、プールの浅瀬を歩いていましたが、孫娘は浮かんだまま脚をばたつかせておお喜びです。

「ほらー、水の中で飛行機ぶんぶんしよう。」

次男は孫娘を軽々と手にのせるとプールの中を泳がせていました。そんな風景を眺めながら、ドリトル先生の誕生祝いのケーキを食べながら、シャンペンをもう一杯。孫娘はケーキを少し食べると、突然、

「バイバイ。」

と、皆に手を振って、疲れたから帰るとサインを送り始め、家を後にしていきました。これに合わせてドリトル先生も家路をたどりました。とても楽しい誕生祝だったようです。こうしてドリトル先生は、確実に後期高齢者の道を更に歩き始めました。

この時期には、久ぶりにモントリオール剣道大会も行われ、ドリトル先生は、大会出席やら、合同稽古やら、審判セミナーやらと何年ぶりかで剣道に振り回されていました。コロナ禍で止まっていた剣道の活動が一気に動き出しました。幸い、マギル大学剣道部の生徒たちが、チームや個人でいくつかの賞をとり努力は報われたようです。この大会に合わせて海外で仕事をしていた生徒たちも戻り、大会は盛り上がったようです。子育てで剣道を休んでいる娘も、学会でやってきた義理の次男も大会の後の宴会に加わり剣道仲間との楽しい時を過ごしたようでした。

義理の次男は学会発表に会わせ個人生活もクリアしようとしたため、我が家はいささか振り回されたのですが、家族とはこんなものなのかもしれません。次男は、早めにモントリオールにやってきて自分の娘を実家の母親に預け（２週間）、息子をフランスの嫁の実家に送り出し（２週間）、北の森で研究中の学生たちにジョイントするため飛行機に乗り飛び発ち、３日後にモントリオールに戻り、剣道をし、研究資料をまとめ学会で発表をし、ニューブランズウィックに戻っていきました。その間、我が家に泊まったり母親の家に泊まったり、友人の家に泊まったり、何もかもいっぺんにしようとし過ぎて、ドリトル先生もマダム田中も嬉しいやら、疲れるやらでしたが、無事に全てが終わりほっとした八月でした。

マダム田中は、順調に回復し、膝のリハビリのプログラムは終わり、これから先は、今までのエクササイズを自分で繰り返しながら、日々の暮らしの中で元に戻れるよう努力をしていくことになります。肩は、まだクリアすることが多く、更に二週間ほどリハビリを続けていくことになります。幸いにも、年齢の割には、回復は早いようです。元のようになるには、まだしばらく時間がかかりそうですが、療法士に伝えた目標、

「膝はイケメンと踊れるように、肩は亭主の頬に大きな張りびんたができるようになれれば」

はいつか達せられそうです。